



サコロペを語る様子（西川北洋『アイヌ風俗絵巻』市立函館図書館蔵）

## アイヌ語

アイヌ語は日本列島を主な分布地域とする二つの言語のうちの一つである。現在、アイヌ語の話者は日本国内でしか確認されておらず、そのほとんどは北海道に住んでいる。かつてはサハリン島南部、千島列島、本州東北地方の少なくとも北海道まで広がっていたが、それらの地域には現在話し手はおらず、本州方言および千島方言は完全に消滅し、その地域の地名に痕跡を残すだけになっていると考えられている。アイヌ語の話し手の数を正確に知ることは難しいが、研究者が把握している範囲に限って言えば、日常会話がほとんどアイヌ語だけでできるレベルの人が数名、物語を丸暗記ではなく自分の言葉を使って語れる人が十数名といつところだと思われる。ただし、長年日本語だけで生活してきたために、自分がアイヌ語を話せること自体を忘れてしまった人や、差別・偏見などのために話せることを隠している人などの「潜在的話者」の存在が十分に考えられ、話者数はそれよりずっと多い可能性がある。

アイヌ語の系統は不明であり、孤立語として分類されるのが普通である。ただし、アイヌ語の南北に分布する朝鮮語、日本語、ニヴフ語、イテリメン語、ユカギール語などもすべて系統関係の不明な言語であり、その意味では極東地域において何ら特別な立場の言語ではない。日本語との系統関係がとりざたされることもあるが、証明されたというにはほど遠い状況である。文法的に言えばむしろ日本語とはかなり違う言語であり、中国語が日本語の音韻、語彙、語構成法などに与えた影響と比べれば、日本語からの影響とみなせる現象は圧倒的に少ない。そこから考えれば、日本語と

相接するようになったのは比較的最近のことではないかと思われる。

方言については、北海道方言、樺太方言、千島方言の三つに大きく分けるのが一般的である。千島方言に関してはあまり詳しいことがわからないが、北海道方言と樺太方言はさらにいくつかの方言に分けられる。といっても、ひとりかふたり程度の話者の記録しか残っていない方言も少なくなく、方言の特徴なのか個人の特徴なのかを峻別することは難しい。また、北海道でも日本海沿岸およびオホーツク海沿岸地域は、宗谷地方を除いてまとまった言語資料がなく、そのあたりの方言がどのようなものであったか不明である。樺太方言と北海道方言の間には比較的大きな隔たりがあり、相互理解はかなり困難だろうと思われる。ただし、アイヌ語の方言間の相違は日本語の方言差に比べればずっと小さい。

アイヌ語の文字表記の歴史は江戸時代に遡るが、アイヌ人自身がアイヌ語を文字で書くようになるのは比較的最近のことである。現在、アイヌ語を表記するにはローマ字とカタカナが主に使われており、カナ表記については音節末子音を小さな文字で表すなど、アイヌ語を表現するための独自の文字の使い方が工夫され、定着しつつある。フランス語、英語、ドイツ語などはローマ字をそれぞれ少しずつ違う形で使っているが、それをそれぞれの言語の固有の文字と見なすのなら、アイヌ語には固有の文字があると言ってよい。ただし、ローマ字にしるカナにしる、正書法というものはまだ決まっておらず、人によって表記はばらばらであり、コミュニケーションの手段として使われる状況も限られたものではない。



財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構主催のアイヌ語弁論大会 (平成14年度、同財団蔵)



知里幸恵編『アイヌ神謡集』 (北海道立文学館蔵)



知里幸恵 (横山むつみ氏蔵)

## 口承文芸

アイヌ人は口頭による文芸を豊かに発展させてきた。従来、「アイヌ文学」と呼ばれてきたものの中には、なぞなぞ、早口言葉、鳥の聴きなし、呪文、神への祈り言葉、即興歌、輪唱、踊り歌などさまざまなものが含まれている。その中で、「文学」というイメージに一番近い、物語性の高いジャンルをとりあげると、おおよそ神謡、散文説話、英雄叙事詩の三つのタイプに分けられる。

神謡は地域によってカムイユカラ、オイナなどと呼ばれるもので、その中心をなすのはカムイ「人間以外の精神を持つ存在。神」である。このカムイ、例えばクマだとか、キツネだとか、火だとかいったものが、自分の体験を語るというスタイルをとることが多い。神謡にはそれぞれに独自の節がついており、その節に乗せて語るものである。また、サケとか、サハと呼ばれる繰り返し言葉がそれぞれの話ごとにあり、それを挟みながら語っていくのも大きな特徴である。知里幸恵『アイヌ神謡集』(1992)は幌別地方に伝わる神謡を原文対訳にしたものだが、アイヌ人自身の手によって初めて書き下ろされたというだけでなく、もっとも広く読まれているアイヌ文学作品集であり、アイヌの伝統的世界観を知るための格好の参考書となっている。

散文説話は地域によってウエペケレ、トウイタクなどと呼ばれるものであり、節をつけずに語られる。主人公は様々だが、普通の人間を主人公としたものが中心であり、やはり自分の体験を語るというスタイルをとる。なかなかドラマチックな複雑な展開の話も少なくなく、往時のアイヌの生活を偲ばせるような民族誌的に興味深い工

ビソドなども随所に現れ、比較的注目されることとが少ないがアイヌ文化を学ぶ上で重要なジャンルである。

英雄叙事詩は地域によって「ユカラ、サコロ」などと呼ばれるもので、神謡と同じく節をつけて語られるものだが、声の出し方も節のつけ方も神謡とはかなり違う。語り終えるのに何日もかかるような長大な話が多く、表現も韻文として整えられたかなり凝った言い回しが多用されるので、神謡や散文説話と違って誰もができるというふうなものではなかったらしい。内容的にも、超人的な力を持った少年英雄が次から次に現れる強敵を倒して美少女を妻に迎えるといったような、勇壮で雄大なものが多いので、アイヌ文学を代表するものとして昔から扱われてきた。もっとも、英雄叙事詩は日常からの逸脱、空想の飛躍というところにその本質が求められるようなジャンルであるので、その内容を直ちに史実に結びつけるのは、いささか無理があると思われる。

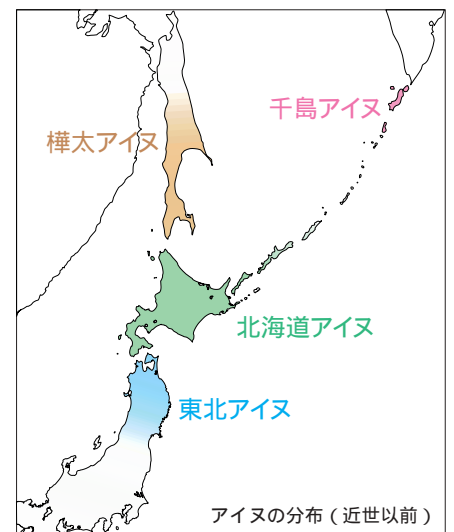
こうした口承文芸の語り手も、アイヌ語の話者とともに消滅することが危惧されてきたが、近年、口承文芸を通じてアイヌ語を学ぼうとする人の数は増えてきている。たとえば、アイヌ文化振興・研究推進機構が主催するアイヌ語弁論大会で、口承文芸による出場者が年々増えていることなどにもそれが見てとれる。日常会話で使われなくなり、辞書や教科書もまだ十分に整っていないアイヌ語のような言語を学び伝えて行くのは、非常に困難を伴うことだが、それを克服するひとつの道がこれらの口承文芸であるのかもしれない。

千葉大学文学部教授

中川 裕

人間=アイヌ (aynu)	川=ペツ (pet)、ナイ (nay)
男性=オッカヨ (okkayo)	海=アトウイ (atuy)
女性=メノコ (menoko)	魚=チェブ (cep)
頭=サパ (sapa)	熊=キムンカムイ (kimun kamuy)
耳=キサラ (kisar)	大きい=ポロ (poro)
目=シク (sik)	小さい=ポン (pon)
口=パラ (par)	歩く=アフカシ (apkas)
手=テク (tek)	食べる=イベ (ipe)
足=ケマ (kema)	美しい=ピリカ (pirka)
村=コタン (kotan)	ありがとう=イヤイライケレ (iyairaykere)
山=ヌプリ (nupuri)	おいしいな=ケラアン フミ (keraan humi)

出典:中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』(草風館、1995)



アイヌの分布 (近世以前)